

# 高機能自閉症スペクトラム障害児はなぜ教室で浮いてしまうのか？

関西医科大学提供  
作成日 2016年2月11日  
更新日



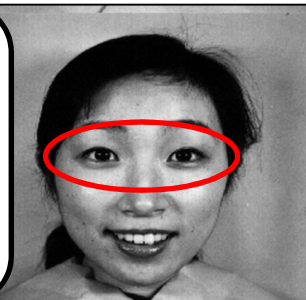
<b>研究者氏名</b> いしざき ゆうこ 石崎 優子	<b>所属機関</b> 関西医科大学小児科	<b>関連キーワード(複数可)</b> 発達障害、スクリーニング、自閉症スペクトラム
<b>主な研究テーマ</b> ・発達障害児のスクリーニング法に関する研究 ・発達障害児の薬物療法に関する研究 ・起立性調節障害児の自律神経機能に関する研究 ・小児の心理・発達の評価法の確立に関する研究		<b>主な採択課題</b> ・基盤研究(C) 平成25～28年度(配分総額:5,070千円) 「視線解析を用いた高機能自閉症スペクトラム障害の早期発見法と社会適応訓練法の開発ー」 ・基盤研究(B) 平成25～27年度(配分総額:17,810千円)研究分担者 「思春期・若年成人がん患者・サバイバーへの医療・教育・就労支援に関する国際比較研究」

## ① 科研費による研究成果

- ・高機能自閉症スペクトラム障害(HFASD)児は早期介入により予後が改善することが知られているが、早期発見の方法は確立していない。
- ・眼球運動は発達障害児と定型発達児とは異なり、視線計測法を用いて「人の顔」を提示した際に定型発達(TD)青年は「眼」を見、HFASD者は「口」を見ると報告されている。しかし学校や園の日常生活場面を視覚刺激とした報告はない。本研究では日常生活場面を刺激画面として、就学前と思春期のTD児とHFASD児の視線運動を比較した。
- ・「人の顔」と「学校の教室場面」を提示した際の「目」への視線滞留時間を解析すると、就学前のHFASD児は人の「目」を見る時間、教室で教員の「指し示す先」を見る時間が短く、このことが、HFASD児が会話を理解し場面を読むのを困難にしていると考えられた。視線解析は就学前のHFASD児の早期発見に利用でき、年長児のソーシャルスキルトレーニングにも役立つと考えられた。



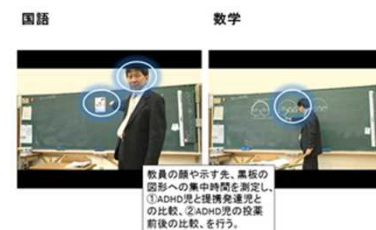
赤の○の領域への視線滞留時間は、ASD児でTD児より優位に短かった。



## ② 当初予想していなかった意外な展開

- ・研究開始当初、2群間で「目」や「文字」といった刺激画面中の対象への注視時間が異なると予想していた。しかし、視線解析を行う過程で、視線滞留時間以外に、視線の動かし方や凝視する際の安定性にも差があることに気付いた。そこで刺激場面として静止画に加えて動画を使用した。
- ・その結果、動画ではさらにASD児は教師の指し示す先への注意集中が困難であり学校での困難さを推察する上で動画の使用がより有用であった。

図 学校の授業場面(動画から抜粋)



## ③ 今後期待される波及効果、社会への還元など

- ・今後、対象をHFASD児だけではなく注意集中が困難な注意欠陥多動性障害(ADHD)児に拡げて、動画を用いた視線計測を行う。ADHD児の薬物療法の前後で学校場面における黒板や教員への視線滞留時間を比較することにより、薬物の効果を客観的に評価することができ、過剰な投薬を回避して薬物の適正使用に寄与することが可能となる。